

からだを

読み解く

九大病院別府病院の研究から

— 3 —

## 負担小さい 単孔式手術



へそからのみ鉗子を入れて行った単孔式手術の術後写真

外科助教 大津甫

現在の外科治療は、体に開けた小さな穴(ポート)からメスが付いた鉗子やカメラなどを入れて治療する「腹腔鏡手術」が普及しています。開腹の手術に比べて傷が小さく、体の負担が

小さい(低侵襲)のが特長です。術式の工夫により、適応する疾患が広がり、特に消化器外科の場合、事前の検査で可能とされれば、第一選択とするのが主流です。

「腹腔鏡手術」が普及して、ポートの数は3、4力所が一般的ですが、近年はできるだけ数を減らしたり、

一つの小さな穴だけで手術をする「単孔式手術」は、最も負担が小さい術式と考えられています。へそなどを活用するため、傷が目立たないのも特長です。

一つのポートからカメラも鉗子も入れるため、鉗子を動かす際に視野がぶれてしまうことが多いという欠点がありますが、鉗子の動かせる範囲や出血量に大きな違いはなく、疾患によっては手術時間も短縮できることが分かっています。また、術後の痛みなども少なく、傷が目立たないため、患者の満足度は高いです。

研究段階ですが、開腹など大きな傷を伴う手術は患者の体の負担が大きく、免

疫力を落とす可能性があるともいわれています。免疫の低下は、がん細胞の活性化につながることも考えられ、ポート数を減らすことはがんの進行抑制につながる可能性があります。

術前に全身状態を確認し、腹腔鏡手術が適応できる疾患か、ポートの数を減らすことができるかどうかを患者一人一人で十分検討します。しかし、条件によっては通常の腹腔鏡手術や開腹など他の術式になることがあります。

大津甫助教



小さくし、